

不登校経験者のきょうだいにとっての不登校

—自身の経験をどのように意味づけるのか—

GH081006 : 下 舞 久 恵

指導教員 : 若本純子講師

I. 問題と目的

不登校をどのように理解し、意味づけていくのかは家族内においても異なるとされる（青田, 2007）。これまでに親の不登校に対する理解や意味づけについての研究（たとえば内田, 1992; 小野, 1993）は進んできているが、きょうだい（以後、不登校となった子どもを「同胞」、その兄弟姉妹を「きょうだい」と記述する）を対象とした研究は少ない。不登校の状態像が多様であることから、きょうだいの置かれる状況やその中で経験することも多様であると考えられる。

これまでに、不登校の子どもたちのきょうだいを対象とした研究（前川, 2000）や不登校経験者のきょうだいを対象とした研究（澁澤, 2004; 溝口・菅沼, 2006）が行われている。これらの研究では、不登校におけるきょうだいの体験や葛藤、きょうだいの経験がネガティブな意味づけからポジティブな意味づけへ転換するプロセスについては明らかにされているが、きょうだいが経験を意味づける多様性については考察されていない。本研究では、きょうだいが兄弟姉妹の不登校によって体験した“自身の経験”をどのように捉え、自己の中に意味づけているのかについて検討を行う。なお、意味づけの定義は「不登校経験者のきょうだい、“自身の経験”をどのようなものとして捉えているか」とする。

II. 方法

対象者 ①意味づけることが出来る、②情緒のコントロールが出来る、③今の自分と距離をもって眺めることが出来る、という点から、不登校経験者のきょうだいで大学生以上を対象とした。まず、大学院教員・大学院生に協力及び研究協力者の紹介を依頼した。また、協力依頼文を作成し、大学教員に事前に趣旨説明を行い依頼文配布の承諾を得た上で、講義時間に約600枚配布して協力者を募った。その結果、8名から調査協力の承諾を得た。このうち、学校不適応経験者のきょうだいを除いた7名（20代4名、40代2名）を分析の対象

とした。

データ収集方法 面接期間は2009年7月から10月であり、面接場所は研究協力者との相談により決めた。面接開始前に「研究の趣旨」「研究協力者の権利」「プライバシー保護」「面接結果の公表」について確認し、同意を得た。面接では、事前に設定した質問項目、及び質問項目から広がった話についてインタビューを行った。面接の内容は、研究協力者の承諾を得た上で、ICレコーダーに録音した。面接時間は、研究協力者1人あたり30分から80分であった。

分析方法 質問項目をもとに枠組みを作成し、それに従って語りをワークシートとして整理した。次に、ワークシートから「語りの中で大きいと思われる経験」「当時の自分について思うこと」「当時の経験について思うこと」に関連する語りを抽出し、研究協力者一人ひとりがどのようなことから“自身の経験”を意味づけているのかについて検討を行った。さらに、研究協力者の語りを枠組みにおけるカテゴリーごとに比較し、共通する、あるいは個々人に特有の意味づけについて検討を行った。

III. 結果と考察

研究協力者の“自身の経験”に対する意味づけは、肯定的なものや否定的なもの、中立的なものと同様であった。“自身の経験”に対する研究協力者の意味づけを表1に示す。

研究協力者は同胞が不登校になることにより、同胞と親の間に入らざるを得ない状況に置かれて、それをきつく感じながら両方の話を聞いたり（Aさん・Bさん・Eさん）、同胞の支えになれていない（Eさん）、同胞に何も言えない自分は無力だ（Gさん）とショックを受けたり、不甲斐なさ（Bさん）を感じていた。そして当時の自分に対し、「もう少し一緒にいてあげたらよかった」（Aさん）と責める気持ちや、「何か出来たんじゃないか」（Cさん）と後悔する気持ち、「今のままでももう少し頑張れば終わるから、頑張れよ」（Fさん）と

慰める気持ち、「家族に囚われ過ぎ」(Bさん) という自分の状態を気づかせたいという気持ちなどが語られた。

表1 “自身の経験”に対する研究協力者の意味づけ

	自身の経験に対する意味づけ
A	1 家族の中での自分を見つめなおすきっかけ
	2 母親、同胞といい距離感を保てるようなもの
B	1 自分がどうすべきかを自分なりに考える機会
	2 ずっと、ある程度は残っていくもの
C	1 完全に昔の話・単なるワンエピソード
	2 自分の人生の一部以上のものではない
D	1 仕事上役に立っている・自分を振り返る機会
	2 人が色んな思いを抱えていることを、忘れないように出来る
E	1 人生の中での、ちょっとした一場面
	2 教職に就いて話をするときに、真実味がある
F	1 いつか使えるかもしれないが、なるべく使いたくないような経験
	2 使い道があるかどうか分からない経験・ただの経験
G	1 自分の進路を導いてくれたいい経験
	2 勉強する上でのモチベーション

(注)1: 現在、自身の経験がどのようなものか

2: 今後、自身の経験はどのようなものになるか

このような“自身の経験”が、現在の自分にとってどのような意味や影響をもつのかについて、Aさん・Bさん・Dさん・Eさん・Gさんは肯定的に捉えていた。一方で、Cさんは「(当時の経験が)特にどうこうっていうのは、無いかな」と中立的に捉えており、Fさんは否定的に捉えていた。また、今後の自分にとっての意味や影響については、Dさん・Eさん・Gさんは“自分のために活かしていけるのではないか”，Aさんは“同胞や母親との関係にいい変化をもたらすものではないか”と肯定的に捉えていた。そして、Bさんは“プラスとマイナスの両方の影響があるのではないか”と肯定・否定の両方で捉えており、Cさんは“他の経験と同じように自分の人生の一部であるが、それ以上のものではない”と中立的に捉えていた。Fさんは、現在も同胞との関係が良くないことから、“自身の経験”は「思い出」と呼べるものではなく、「ただの経験」であり、今後も“使い道があるかさえ分からない経験”だと中立的に捉えて

ていた。

研究協力者が語った“自身の経験”は、それがどのような意味や影響を持つのかどうかに関わらず、人生の一部に位置づけられていた。そして、そこに意味づけられたものは、研究協力者一人ひとり異なり、“自分について考えるきっかけ”であったり、“単なる1つの経験”であったりと様々であった。そのような意味づけには、「今は普通に妹も、働いてるし」(Cさん)、「ちゃんと立ち直ったし」(Eさん)という“同胞が不登校ではなくなったこと”によるところも大きく、加えて不登校でなくなった後の同胞や親との関係、現在の研究協力者自身の状態が関係していることが考えられる。

きょうだいは、同胞が不登校になることにより、色んなことを考え、時には苦しさ、きつさを感じながら過ごしていた。そして、その経験は同胞が不登校でなくなったからといってなくなるものではなく、これまでの人生を通して意味づけを変化させながら、きょうだいの中にあり続けている。そのあり方は、自分から思い出すことによって役立てたり、あえて思い出すことはせず1つの経験としていたり様々である。現在の自分と結びつけながら、あるいはCさんのように、「昔の話し」として忘れるという形で、“自身の経験”と折り合いをつけてきたのではないかと考えられる。

本研究では、これまで研究や援助の対象とされることの少なかった、不登校経験者のきょうだいを対象とし、“自身の経験”を現在どのように意味づけているのかについて検討することで、意味づける過程の一端を見ることができた。

不登校において、主に援助の対象となるのは不登校児童生徒本人とその両親である。このことから、きょうだいに対する援助はきょうだいに直接行うというのではなく、両親を通じて間接的に行うことが出来るだろう。不登校がきょうだいにも影響を与えることを認識し、親にきょうだいのことを含めた心理教育や具体的な関わりを提案していくことにより、きょうだいに対しても援助を行っていけるのではないかと考える。

今後は、発達段階を考慮した検討や継続的な面接によって、きょうだい“自身の経験”を意味づけるプロセスを検討していく必要があるだろう。